

ベトナム島嶼部の考古学

－回顧と展望－

菊池誠一
菊池百里子

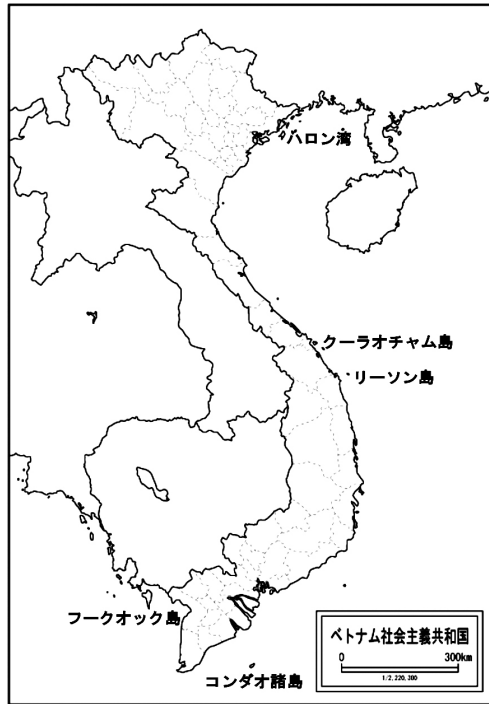
はじめに

ベトナムはインドシナ半島の東側に位置し、北に中国、西にラオスとカンボジアが国境を接し、東に南シナ海（ベトナムでは東海とよぶ）が広がる。中国広西壮族自治区に接する北部のランソン（Lang Son）省モンカイ（Móng Cái）市からカンボジア国境に接するキエンザン（Kiên Giang）省ハーティエン（Hà Tiên）市までの海岸線は3,260kmほどに達する。

このベトナム海域には大小のさまざまな島がよこたわる。その代表的な島を北から海岸線にそってみれば、北部クアンニン（Quảng Ninh）省のハロン（Hạ Long）湾にうかぶカットバー（Cát Bà）島をはじめとする島々、中部ホイアン（Hội An）市の東海上のクーラオチャム（Cù Lao Chàm）島、さらにその南のクアンガイ省リーソン（Lý Sơn）島、ビントゥワン（Bình Thuận）省フークイ（Phú Quý）島、バーリア・ヴンタウ（Bà Rịa-Vũng Tàu）省コンダオ（Côn Đảo）諸島、そしてタイ湾にうかぶキエンザン省フークオック（Phú Quốc）島とつながる。さらに眼を上げれば、中華人民共和国などと領有問題を有している英語名でパラセル諸島（Paracel Islands）とスプラトリー諸島（Spratly Islands）がある。

本稿は、南シナ海をめぐるモノの移動や交流の視点から、ベトナム島嶼部の考古学調査研究を回顧し、今後の研究を展望する。ベトナムでは近年、本土側だけではなく、島嶼部の考古学研究が展開され、移動や交流の歴史を考えるうえで重要な知見がえられつつあるからである。

なお、本稿は1.を菊池百里子が、2.から4.までを菊池誠一が執筆し、5.と「はじめに」、「おわりに」は両者が共同で執筆した。



ベトナム地図

1. ハロン湾の島々の考古学調査

ハロン湾は1994年にユネスコの世界自然遺産に登録された。その指定範囲には大小3,000もの島々が存在する。この地域は中国の桂林からベトナムのニンビン (Ninh Binh) 省までつづく石灰岩台地の一角であり、この台地が沈降し、波に侵食されたことで奇岩が造り出され、風光明媚な地となっている。自然遺産のバッファーズーンには島民の住むクアンラン (Quan Lan) 島やコンタイ (Còn Tay) 島、チャーバン (Chà Bàn) 島など比較的大きな島もある。

ハロン湾においては、カットバー島やバッファーズーンに位置する島々で考古学調査がおこなわれてきており、その学術的調査目的は、新石器時代後期のハロン文化の研究および大越時代の国際港であった雲屯 (Vân Đồn) の解明の、2つに集約できる。

ハロン文化とは、5,000～4,000BPの年代をもつ新石器時代後期の文

化である。ハロン湾一帯の遺跡で出土した遺物をもとに、フランス植民地時代にヨーロッパ人研究者によって文化設定された。高度に発展した漁撈・採集・狩猟社会と考えられ、その代表的な遺物は磨製石器であり、有肩石斧や有段石斧、有肩有段石斧などの特徴がある。とくに、有肩有段石斧は中国の南部を起源として香港や海南島、台湾に拡散したという見解もあり、広い視野からの研究が必要であろう。また、つぎの青銅器文化への移行にこの文化がどのような影響をあたえたのかという点も、重要な研究課題である。

このハロン文化を扱った研究書としては、*Hà Long Thời Tiền Sử* (『先史時代のハロン⁽¹⁾』)や *Khảo cổ Học vùng duyên Hải Đông Bắc Việt Nam* (『ベトナム東北海域の考古学⁽²⁾』)などがある。

つぎにベトナム封建王朝の対外貿易港であった雲屯の研究がハロン湾の島々において実施されてきた。ベトナムの官撰史書『大越史記全書』によると李朝の1149年に「雲屯」の地に対外貿易港が築かれたとされる。この「雲屯」がどこであったのか、その位置比定が戦前からおこなわれてきた。とくに、日本人研究者の山本達郎は1939年に「安南の貿易港雲屯⁽³⁾」を發表し、その位置をクアンラン島に比定した。その比定にあたっては島を踏査したときにえた考古資料を活用していた。そしてこの研究は、独立後のベトナム人研究者に大きな刺激をあたえた。ベトナム史学院の研究者であるドー・ヴァン・ニン (Đỗ Văn Ninh) は山本の論文を参考にしながらハロン湾地域の島々を踏査し、その研究成果を *Vân Đồn* (『雲屯 = ヴァンドン⁽⁴⁾』) にまとめ出版した。その後、ベトナム考古学院のチン・カオ・トゥオン (Trịnh Cao Tường) も各島を踏査し、各島に分布する遺物の年代をもとに、港は時期により移動したとベトナムの学術会議で報告した⁽⁵⁾。

1991年になると日本人研究者らが各島の踏査をおこない、表採資料の報告をしている⁽⁶⁾。その後、沖縄県史編纂室の調査団も同様にハロン湾地域の各島を踏査し、表採資料から各島における遺物の時期の違いを報告した⁽⁷⁾。

このように、ハロン湾に築かれたとされるベトナム最初の対外貿易港に関する考古学的研究は、ベトナム人研究者だけではなく、日本人研究者の関心事でもあった。とくに、沖縄の首里城では、14世紀から15世紀に生産されたベトナム陶磁器が多数出土しており、琉球王国時代に東南アジア交易によって沖縄に運ばれたベトナム陶磁器について、その生

産地や輸出港がどこだったのか、という点に研究者らから関心もたれてきた。

しかし一連の「雲屯」研究では、山本の研究の足跡を辿って遺物（陶磁器）の分布状況を把握する踏査のみが行われ、考古学的発掘調査が実施されてこなかった。このため、雲屯研究は遺物の生産年代をもとにした遺物の分布状況から港の位置を特定する研究に集約されていった。筆者の一人である菊池百里子は、港としての歴史や機能、構造、交易品の具体的な様相などを明らかにするための考古学調査をはじめてハロン湾⁽³⁾で実施し、その成果を『ベトナム北部における貿易港の考古学的研究』にまとめた。

この中で、大越国の各時代（11世紀から18世紀）における交易様相について、李朝期にはすでにベトナムの地で陸や海を通した交易活動がおこなわれ、陳朝期になるとコンタイ島で13～15世紀を代表する中国の上質な貿易陶磁器が多数出土することから、雲屯が陳朝期には貿易港としての存在していることを指摘した。しかし、雲屯港にもたらされた中国陶磁器は、大越国むけの商品ではなく、出合いや中継貿易によってその大部分がマジャパイトなど海域アジアへ分散していったと考えた。また、黎朝前期のベトナム陶磁器は沖縄の首里城やインドネシアのトロウラン遺跡などアジア各地で発見され、その種類も豊富であるため、ベトナム北部産の陶磁器は1440年代にはある程度の規模で輸出を開始し、15世紀後半に生産、輸出の最盛期を迎えていたと考えた。これらの成果から、黎朝前期の雲屯港はもはや陳朝期のような中継貿易や出合い貿易の場ではなく、大越国の商品を輸出するための玄関として機能していたと考察した。そして黎朝後期には、ベトナム国内で16世紀後半から17世紀代の中国や日本の陶磁器が多数出土していることから、中国人商人との交易の場としてのクアンラン島のカイラン地点の存在を指摘し、雲屯港が近世でも港であったことを明らかにした。なお、『大越史記全書』に記載された12世紀の港の存在については、これまでの考古学調査では特定できていない。今後の課題のひとつである。

2. 中部クーラオチャム島の考古学調査

中部クアンナム (Quảng Nam) 省ホイアン市の東海上にクーラオチャム島がよこたわる。この島はホイアン市のクワダイ (Cửa Đại) 河口から東約 15km に位置し、8つの島、ホンラオ、ホンザイ、ホンモー、ホンホメ、ホンホーコン、ホンラー、ホントイ、ホンオン (Hòn Lao, Hòn Dài, Hòn Mỏ, Hòn Khô Mẻ, Hòn Khô Con, Hòn Lá, Hòn Tai, Hòn Ông) からなる。一番大きい島のホンラオ島には 3,000 人ほどが住み、おもに漁業に従事し、それ以外の島は無人である。

この島は、9世紀頃のアラブ商人の記録に「サンダル・フーラート」と記された島と考えられており⁽⁹⁾、西アジア世界と東アジア世界とつなぐ南シナ海の重要な寄港地と考えられてきた。9世紀のクーラオチャム島はチャンパー王国の版図であり、チャンパー史研究上の重要な位置をしめている。また、17世紀前半の朱印船寄港地として知られ、日越交流を考えるうえでも重要である。

ホンラオ島の外洋に面した岸壁に海燕の巣がとれる洞窟があり、また島の周囲にはサンゴ礁がみられる。多様な生物群を保全するため、2007年にベトナムの海域保存地域に、2009年にはUNESCOの生物圏保護区に指定されている⁽¹⁰⁾。

これまでクーラオチャム島では、当時のハノイ総合大学(現、人文社会科学大学)が1999年から2001年にかけてホンラオ島のバイオン (Bãi Ông) とバイラン (Bãi Làng) で発掘調査をしている。この調査では、バイオン地点で先サーフィン文化(3,500年前頃)の土器や石器が出土した。バイラン地点では9～10世紀頃の中国貿易陶磁器(越州窯系青磁、長沙窯陶器など)やイスラーム・ガラス、同陶器などが出土した⁽¹¹⁾。

私たちは9世紀前後の港の解明を目的に2017年と2018年にホンラオ島のバイラン地区で発掘調査を実施した。この場所は、かつてハノイ総合大学が発掘調査した地点からも至近距離で海岸から50mほど山側に位置している。トレンチの上層から9～10世紀頃の越州窯系青磁などの初期貿易陶磁器片とともにイスラーム・ガラス片、ガラス小玉が出土している。しかし、下層になると初期貿易陶磁器の出土はないが、イスラーム・ガラス片やチャンパー陶器・土器片、ガラス小玉などがみられた。そのため、貿易陶磁器の存否を基準に大きく二時期に分けられる可能性がある。

出土遺物は、9～10世紀頃の初期貿易陶磁器（越州窯系青磁、長沙窯陶器、白磁）や同時代の中国南部からベトナム北部の施釉陶器・無釉陶器、チャンパー無釉陶器・土器、そしてイスラーム・ガラス、同陶器、各種のガラス小玉などである。さらに、16世紀以降の遺物もみられた。

イスラーム・ガラスは淡緑色、淡青色などの色調をおびた碗や瓶の破片であり、このなかにはイスラーム初期時代に特徴的な内側に折り返した口縁部をもつものがみられた。8世紀後半にさかのぼる可能性がある。イスラーム陶器は青緑釉貼付文壺の破片である。これらと共伴した無釉の陶器、土器の一部は同時代のチャンパー製品である可能性がたかい。ガラス小玉は東南アジア産と考えられるものも含まれている⁽¹²⁾。

この調査によって、「海の道」におけるクーラオチャム島の歴史的な位置がより明確になった。とくに、イスラーム・ガラス器の東アジア地域への流入に関して、東南アジアの他地域、タイ中部のコー・コ・カオ（Koh Kho khao）、ラエム・ポー（Laem Pho）、マレーシアのブジャン（Bujang）溪谷などが知られていたが、さらに重要な資料を追加した。このことは、東南アジアの海上を經由してガラス器が東アジアにもたらされたことを意味する。

同時に、初期貿易陶磁器を伴わない下層からイスラーム・ガラスが出土しており、8世紀後半にさかのぼる可能性があらたに確認できた。また、共伴した無釉陶器や土器は同時代のチャンパー陶磁器の可能性があり、これまで知られていなかった当該期の考古資料をえることができた。今後、編年を組み立てるうえで基準資料として活用ができよう。しかし、12世紀頃から15世紀頃の遺物がほとんどなかった。

今後の課題として、先サーフィン文化と考えられる土器の起源と9世紀前後の「海の道」上の位置、その後の港の位置とその変遷、さらに居住地の解明があげられる。土器は南シナ海をめぐる交流を視野に入れることが必要となろう。また、出土陶磁器はチャンパー時代の編年資料となりえる重要な資料である。

3. リーソン島とコンダオ諸島の考古学調査

クアンガイ省リーソン島は本土から東28kmほどに位置している。ふたつの島からなり、大きな島をリーソン島、小さな島をクーラオボーバイ（Cù Lao Bờ Bãi）とよぶ。人口は2万人ほどで大半が漁業とニンニク栽

培に従事している。

リーソン島ではベトナム考古学院が1997年にソムオック (Xóm Ốc) 遺跡を発掘調査し、青銅器時代の先サーフィン文化から初期鉄器時代のサーフィン文化の文化層を確認し、紀元前1千年から紀元後1世紀ころの年代と推定している⁽¹³⁾。また、この遺跡から3kmほど離れたところにスオイチン (Suối Chinh) 遺跡がある。1999年から2005年まで考古学院が断続的に調査し、居住地や墓跡を検出し、青銅器や鉄器、土器、石器、ガラスなどの遺物が出土した。サーフィン文化とサーフィン・チャンパー文化の二時期と認定され、前者の年代を紀元前4、5世紀から後1世紀とし、サーフィン文化から次代のチャンパー文化への移行期であるサーフィン・チャンパー文化をクアンナム省のチャキユウ (Trà Kiêu) 遺跡の下層と同時期、つまり紀元後3、4世紀ころと推定した。中国系遺物である印紋陶やチャキユウ出土丸底土器との類似、そしてチャンパー文化に特有のケンディ (注口土器) などがあることによる⁽¹⁴⁾。また、この遺跡から9世紀前後のイスラーム陶器やチャンパー時代のゴーサイン (Gò Sảnh) 窯製品もみられるという⁽¹⁵⁾。

コンダオ諸島はヴンタウ (Vũng Tàu) 市から170kmほどの海上にあり、大小16の島からなる。最大の島はコンソン (Côn Sơn) 島で幅20mほどの水路を隔ててホンバー (Hòn Bà) 島がよこたわる。

この島はフランス植民地時代にプロ・コンドール (Poulo Condore) とよばれていた。フランス植民地時代から1975年まで、政治犯の流刑地として知られ、最大規模の政治犯収容所があり、多くの政治犯がこの地で処刑された。若いころのファム・ヴァン・ドン (Phạm Văn Đồng、元首相) からも収監されていたこともあった。

これまでコンダオ諸島では11遺跡が確認され、そのなかには青銅器時代後半から初期鉄器時代の居住地や墓地があり、甕棺も検出されている。そのため、ベトナム南中部と東南部のサーフィン文化との関連が指摘されている。

また、コンダオ諸島は1294年のマルコ・ポーロの『東方見聞録』にも登場し、中国から南下する14隻の船がコンダオ諸島付近で暴風に遭遇し8隻が沈没、他の船がコンダオ諸島に退避したという。

そして、ヨーロッパ勢力がアジアに進出した16世紀以降、とりわけイギリスとフランスの勢力は17世紀後半から18世紀前半にかけて、このコンソン島を調査した。イギリス東インド会社は1697年に北部ベト

ナムの商館を閉鎖し、1702年から1705年にかけて貿易拠点をこの島においた。1994年に私たちは島を踏査し、島の東南地区の海岸付近の砂丘上に17世紀末から18世紀初頭の中国景德鎮産の青花、ベトナム陶器、ガラス製のワインボトルなどが大量に散布していたことを確認した。遺物群のなかには9世紀頃のイスラーム陶器もあり、イスラーム商人の来港を裏づけるものである⁽¹⁶⁾。

リーソン島とコンダオ諸島の考古学研究は、先史時代の人びとの島嶼部への移動時期、さらに本土の先サーフィン文化やサーフィン文化との関係、「海の道」上の歴史的 position と港の構造、かつイギリス東インド会社の位置と構造を解明することがもとめられている。今後の重要な研究課題である。

4. パラセル諸島とスプラトリー諸島の考古学調査

パラセル諸島はベトナムの東約240km、中華人民共和国海南島の南東約300kmに位置し、中華人民共和国が実効支配しているが、ベトナムと台湾も領有権を主張している。そのため、パラセル諸島を中国名では「西沙諸島」とよび、ベトナムでは「ホアンサー (Hoàng Sa)」諸島とよぶ。また、スプラトリー諸島はベトナムと中華人民共和国、台湾、フィリピン、ブルネイと領有権を争い、ブルネイ以外はそれぞれいくつかの島を実効支配している。中国名では「南沙諸島」、ベトナム名では「チュオンサー (Truong Sa)」諸島とよび、ほかにタガログ名がある。

1993年から1999年まで、ベトナム考古学院がチュオンサー諸島の4島で踏査や発掘調査を実施した。この調査でサーフィン文化後期からチャンパー時代初期の遺物と遺構が検出されている。とくに土器はベトナム中部海岸地域に分布するサーフィン文化後期（初期鉄器時代）の土器との類似が指摘されている。また、14世紀から15世紀のベトナム青花が出土している⁽¹⁷⁾。ベトナム青花の確認は、輸出用ベトナム陶磁がどのような航路で海外にでていったのかを知るためにも興味深い。

両諸島とも領有権問題があり、かつ実効支配されている島があるため、十分な調査ができる状況にはない。そのため、考古学資料からこの諸島への人びとの移動時期と周辺地域との交流などの研究には、政治的問題決着後の将来にまつしかない。



東南アジア地図

5. 「海の道」とベトナム島嶼部

「海の道」は、西アジアの商人が中国唐代以降にアラビア海、インド洋沿岸を經由して東南アジアに至り、南シナ海を北上して中国南部に至る海上ルートである。しかし、古くは『後漢書』に2世紀のこととして、ローマ皇帝の使者をなれる者がベトナム経由で入貢したとあり、唐代以前から海上ルートによる交流があった。ベトナムのアンザン（An Giang）省オケオ（Óc Eo）遺跡で2世紀のローマ金貨やインド系遺物が出土していることは、それを裏づけるものである。

さらには、先史時代にベトナム北部で生産された銅鼓が東南アジア大陸部だけではなくインドネシアでも出土している⁽¹⁸⁾。また、台湾産の玉で製作された球状耳飾りがフィリピンやベトナム、タイなどでも確認されていることは、早くから南シナ海域内の「海の道」の存在が指摘できるのである⁽¹⁹⁾。

ベトナム海域には島嶼部の遺跡だけではなく、周辺海域の水中遺跡が存在する。その代表的な遺構が沈没船である。島嶼部の考古学は、この沈没船と深く結びつく。これまでベトナムでは6隻の沈没船調査がおこなわれている⁽²⁰⁾。クーラオチャム島海域では15世紀後半のベトナム陶磁

24万点以上を積んだ船の考古学調査が実施されている。本土側のリーソン島の対岸に位置するチャウタン（Châu Tân）海岸では9世紀ころの沈没船が確認され、引き揚げ遺物に中国越州窯青磁や長沙窯陶器、イスラム陶器などがあり、そのなかにはアラビア文字やインド系の文字が確認される陶磁器までであったという⁽²¹⁾。

コンダオ諸島では1990年に沈没船が調査され、出土遺物から1690年頃の船と考えられている。キエンザン省フークオック島海域では船体が確認され、15世紀から16世紀のタイ陶磁器などがみつかったという。

また、船体は見つかっていないがベトナム沿岸部で商船が沈没したという記載が史料にでてくる事例もある。それは、日本の朱印船である。ベトナム北中部のゲアン（Nghê An）省とハティン（Hà Tĩnh）省の省境を流れるラム（Lam）川の河口部で、江戸時代初期に京都の豪商角倉氏の商船が渡航し、交易をしていたことが日本に残されている史料からわかる。この中に、ゲアン-ハティン地域の役人である文理候が1610年に日本に送った手紙である「安南国文理候書簡」（九州国立博物館蔵）がある。この手紙には1609年にラム川河口部に渡航した角倉船が、日本に向けて出港してすぐ沈没し、船長以下13名が死亡、105名が救出されたことが書かれている。そして、救助された人びとは、現地有力者である舒郡公、文理候、広富候の各氏の庇護のもと食料や衣服などを支給された。また、当時のベトナム北部の支配者、鄭松は、文理侯らに命じ大船を作らせ、救出された人びとを日本に返したとある⁽²²⁾。2017年以降、筆者らはラム川の河口部で水中考古学調査を実施しているが、いまだに船体の発見に至っていない。しかし、砂の堆積が厚いため、沈没した朱印船が良好な状態で残存している可能性が高く、そのまま発見されれば往時の朱印船の姿、積載貨物を知る重要な発見につながる可能性を秘めている。

おわりに

「海の道」と結びつく島の周辺海域には、各時代の沈没船の存在を予想させる。ベトナム島嶼部の考古学調査は、こうした水中考古学と密接な関係にあるため意義深い。そして、島嶼部にわたった人びとの起源、土器を通じた他地域との交流、陶磁器の交易など、国境をこえた研究課題となる点でも重要な課題であろう。

註

- (1) Hà Hữu Nga, Nguyễn Văn Hào 1999 *Hạ Long Thời Tiền Sử*.
- (2) Nguyễn Khắc Sử (ed.) 2005 *Khảo cổ Học vùng duyên Hải Đông Bắc Việt Nam*, NXB Khoa Học Xã Hội.
- (3) 山本達郎 1939 「安南の貿易港雲屯」『東方学報』第9冊：1-33頁。
- (4) Đỗ Văn Ninh 1997 *Huyện Đạo Văn Đồn*, Ủy ban Nhân dân huyện Văn Đồn.
- (5) Trịnh Cao Tường 2000 *Báo cáo sơ bộ về cuộc điều tra nghiên cứu thương cảng Văn Đồn để tài khoa học Viện Khảo cổ học*, Tư liệu về Khảo cổ học.
- (6) 青柳洋治、小川英文 1992 「ベトナム陶磁器の編年的研究と古窯址の調査報告—ベトナムの古窯址と貿易港 Văn Đồn を訪ねて—」『東南アジア考古学会会報』第12号：58-74頁。
- (7) 安里嗣淳、菊池誠一、金武正紀、手塚直樹 1998 「ベトナム陶磁調査紀行」『資料編集室紀要』第23号、沖縄県教育委員会：143-165頁。
- (8) 菊池百里子 2017 『ベトナム北部における貿易港の考古学的研究 ヴァンドンとフォーヒエンを中心に』雄山閣。
- (9) 家島彦一 2007 『中国とインドの諸情報』平凡社・東洋文庫：40頁、140頁。
- (10) BQL Khu Dự Trữ Sinh Quyển Thế Giới Cù Lao Chàm-Hội An 2018 *Tài Liệu Truyền Thống Về Khu Dự Trữ Sinh Quyển Thế Giới Cù Lao Chàm-Hội An*.
- (11) Lâm Thị Mỹ Dung 2004 「Khảo Cổ Học Cù Lao Chàm」『ベトナム・ホイアンの学際的研究—ホイアン国際シンポジウムの記録—』昭和女子大学国際文化研究所：189-200頁。
- (12) 山岸良二・菊池誠一・大橋康二・Lam Thi My Dung・Dang Hong Son・Vo Hong Viet・昭和女子大学ベトナム考古学チーム・ハノイ国家大学人文社会科学大学チーム・ラオス国立大学チーム 2019 「ベトナム・クラーオチャム島の発掘調査—海のシルクロードの要衝—」『一般社団法人日本考古学協会第85回総会研究発表要旨』：72-73頁。
- (13) Phạm Thị Ninh, Đoàn Ngọc Khôi 1999 “Xóm Ốc, di tích văn hóa Sa Huỳnh trên đảo Lý Sơn(Quảng Ngãi)”, *Tap chí Khảo cổ học*, số 2, Nxb.Khoa học Xã hội Hà Nội :14-39.
- (14) Lâm Thị Mỹ Dung 2018 *Sa Huỳnh-Lâm Ấp-Chămpa*, Nxb. Thế Giới :86-92,268-270.
- (15) Nguyễn Hồng Kiên 2017 “Cù lao Ré/Lý Sơn; Những vấn đề thực tiễn và lý thuyết về nghiên cứu Khảo cổ học Biển đảo”; in Lâm Thị Mỹ Dung- Đặng Hồng Sơn (ed.) *Khảo Cổ Học Biển đảo Việt Nam; Tiềm Năng và Triển Vọng*, Nhà Xuất Bản Đại Học Quốc Gia Hà Nội :633-640.
- (16) 菊池誠一 1997 「ベトナム発見の安平壺」『東国史論』第12号：83-91頁。

(11)

- (17) Lại Văn Tới 2017 “Những phát hiện khảo cổ học tại Quần đảo Trường Sa (Việt Nam)”; in *Khảo Cổ Học Biển Đảo Việt Nam Tiềm Năng Và Triển Vọng* (前出):530-541.
- (18) 新田栄治 2010 「銅鼓の起源と拡散」『海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ』高志書院：91-107頁。
- (19) 飯塚義之 2010 「台湾産玉（ネフライト）の拡散と東南アジアの先史文化」『海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ』高志書院：51-65頁。
- (20) 菊池誠一 2010 「ベトナム海域の沈没船－近年の水中考古学調査から－」『海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ』高志書院：139-155頁。
- (21) TS.Nishino Noriko, TS.Toru Aoyama, TS.Jun Kimura,TS.Takenori Nogami, TS. Lê Thị Liên 2017 Dự án Nishimura :Con tàu đắm cổ nhất tìm thấy ở Việt Nam-Chứng cứ về tuyến đường gốm sứ trên biển; in *Khảo Cổ Học Biển Đảo Việt Nam Tiềm Năng Và Triển Vọng* :410-422.
- (22) その考察は、以下を参照。菊池百里子 2018 「ベトナム北部の朱印船寄港地、ゲティンにおける日越交流の新展開」『専修大学社会知性開発研究センター古代東ユーラシア研究センター年報』第4号：175-184頁。
- (23) 藤田励夫 2014 「安南日越外交文書集成」『東風西声』第9号：17頁。

参考文献

- 菊池誠一・阿部百里子編 2010 『海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ』高志書院
- 青柳洋治・森本朝子・小川英文・田中和彦 1995 「ベトナム中部諸省の遺跡調査と考古学的課題」『東南アジア考古学』第15号
- 林田憲三編 2017 『水中文化遺産』勉誠出版
- Trịnh Cao Tường 2007 *Một Chặng Đường tìm về quá khứ*. Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội (チン・カオ・トゥオン 2007 『過去を解明する道』社会科学出版社)
- Trung Tâm Quản Lý Bảo Tôn Di Sản Văn Hóa Hội An 2014 *Thông Tin Nghiên Cứu Cù Lao Chàm* (ホイアン文化遺産保存管理センター 2014 『クーラオチャム研究情報』)